

中国・宋時代（十～十三世紀）に作られたとされ、現存する三点全てが国宝に指定されている茶碗「曜変天目」。その再現に挑んでいる瀬戸市上品野町の陶芸家長江惣吉さん（左）の個展「曜変・長江惣吉展」が七月三十日まで、同市美術館で開かれている。

（堀井聡子）

国宝の宇宙再現の碗

国宝の曜変天目は、黒い釉薬の中に現れる瑠璃色の斑紋が特徴だが、製法は謎に包まれている。

長江さんが二〇〇六年に再現を試みた二つの曜変天目茶碗は、星のような斑紋が漆黒の闇に浮かび、光にかざすと全体が虹色に照り輝く。片手に収まるほど小さな碗の中に、宇宙が広がっている。

「今まで二万個作ってきたが、人に見せられるものはこの二つ。国宝はもつときれいで、きつめきが違つ」と話す。長江さんは、明治初期から続く窯元の九代目。曜変天目の研究は先代の父が始めたが、二十二年前に亡くなった。生前は「歴史ある窯元として地道に焼き物を作る方が大切」と研究に反対していたが、父の死をきっかけに研究を引き継ぐことを決めた。

瀬戸・長江さん「曜変天目」個展



研究について父に詳しく教では禁じられていた曜変天目。わったことはなく、ほぼ一かの産地・福建省建窯への渡航からのスタートだった。父の代が解禁され、計二十八回視

察。当時の窯跡や土の成分などを調査して原料を入手し、製法の解明に取り組んできた。

その結果、焼成中に窯の温度が下がっていくときに蛍石を投入し、酸性ガスを発生させることで釉薬の表面を化学変化させ、鮮やかな斑紋を生み出したと確信した。長江さんが作った二つの曜変天目

は、この製法で再現したもの。昨年十二月、テレビ東京の番組「開運！なんでも鑑定団」で曜変天目茶碗が取り上げられた。「本物に間違いのない」と二十五万円の鑑定額

があったが、長江さんは「本物の曜変天目ではない」と異議を唱え、注目を集めた。

長江さんは「国宝は昨日作られたように色鮮やか。国宝レベルに到達するには、まだまだ研究が必要。これからも迫っていきたい」と話した。

会場では、長江さん作の曜変天目だけでなく、長江さんが曜変の技術を生かして独自に生み出した茶碗など計二十点も展示している。

開館時間は午前九時～午後五時。七月十一日休館。入館料は一般三百円、高年生二百円、中学生以下と六十五歳以上は無料。同館☎0561



⑤天目茶碗はかりが並ぶ会場と長江さん
⑥青と黒の複雑な色合いや虹のような輝きが内側に広がる長江さん作の曜変天目茶碗。いずれも瀬戸市美術館で